

「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」

共同利用型公募研究成果報告書

小椋 彩

戦間期ポーランドの亡命ロシア文学

20世紀初頭のベルリンやパリは亡命ロシア文化の拠点として知られ、そこで展開された知識人たちの活動については国内外に既に一定の研究の蓄積がある。ワルシャワやヴィルノ、ルヴフといったポーランドの都市もまたそうした拠点に数えられるが、他の欧州都市と比較してコミュニティの規模が小さいこともあり、これまであまり注意を払われてこなかった。本研究ではそうした状況を鑑み、いまだ研究の蓄積の浅い戦間期ポーランドの亡命ロシア文化事情に光を当てること、具体的には、1918年以降1938年までにポーランドで発行されたロシア語の新聞・雑誌を検証し、亡命文学者の出版事情、ポーランド内外の寄稿者の活動、および雑誌がポーランド文化に及ぼした影響を追うことを目標とした。

ところが大変残念なことに、今回のセンター滞在期間中、複数の図書館が長期にわたる工事中で、目当てとしていた新聞・雑誌資料の多数を使うことができないことがわかった。

そこで、当初の計画を変更し、筆者が研究テーマのひとつとしてきた、ロシアとポーランドのモダニズム研究を継続することで今後につなげることにした。

具体的には、ロシア象徴派とポーランド・モダニズム（若きポーランド）の影響関係について、ミチンスキ、プシビィシェフスキ関連の資料、このほか若きポーランド派の次の展開としての「スカマンデル」やポーランド・アヴァンギャルド関連の資料を蒐集した。

分割時代、ポーランドの知識人の多くが、モスクワやペテルブルグで教育を受け、ロシア文化から多大な影響を被ってきた。筆者はこうした影響関係の具体的な検証によって、ポーランド研究および亡命ロシア文化研究の双方に寄与できると考えており、今後も継続的に研究を進めていく所存である。

スラヴ研究センターは、所蔵資料が豊富なうえ、閲覧しやすい。ポーランドのロシア語雑誌・新聞についても、機会を改めて、ぜひ資料蒐集したいと考えている。

最後に、このような機会を与えてくださったセンターに、心よりお礼申し上げます。